

目次

今なぜスウェーデンか

須永 昌博

65回、66回、67回スウェーデン研究連続講座

65回

ヴァイキングから今日のスウェーデン人へ — 現代のスウェーデン人になった理由

ヨハン・バンション

66回

スウェーデンから見た日本 — ジャパン・コネクションを探る

土野 繁樹

67回

平和構築 — スウェーデンの貢献と日本との協力

中満 泉

ニッケルハルパnyckelharpaに魅せられて

鎌倉 和子

JISS所報原稿募集

スウェーデン社会研究所 所報

No.341 2007年12月31日発行

発行所: 社団法人スウェーデン社会研究所

〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1

榊科学新聞社内5階

連絡事務所

〒124-0024 東京都葛飾区新小岩2-19-7

Tel. 03-5661-6035 Fax. 03-3655-1596

e-mail: sweden@tkm.att.ne.jp

URL: <http://www.sweden-jiss.com/index.html>

発行人・編集責任者: 林壮行

Publisher&Editor in Chief: Takeyuki Hayashi

編集者: 久保田健司

Editor: Kubota Takesh

今なぜスウェーデンか

(社)スウェーデン社会研究所 所長
須永昌博

1. はじめに

(社)スウェーデン社会研究所(JISS)は2007年10月で創立40周年を迎えました。この40年間は私がスウェーデン社会にコミットしてきた期間とほぼ同じになります。私は30才の時に創設されたばかりのスウェーデン大使館科学技術部に雇われました。仕事はスウェーデンに対するコンサルタントです。初代の部長、29才のニルス・ホーヌマルクさんは、私が人生で始めて出会ったスウェーデン人で、いまでも厚誼を得ています。以来60才で定年退職するまで、スウェーデン社会にドブプリつかった30年間でした。退職後もJISS、スウェーデン企業へのコンサルタント、及びスウェーデン人への宿泊施設スナガハウスを通じて、スウェーデンとの関係はさらに続いています。

都合40年近いスウェーデンとの経験が、本稿の主題になります。スウェーデン(及び北欧諸国)は実に素晴らしい国だと思います。なぜそう思うのかをここで紹介します。そして日本がこれからとるべき道へのヒントを考えてみます。

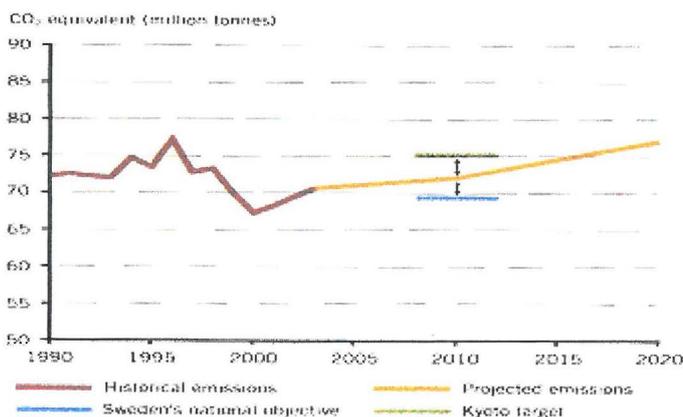
2. 国際ランキング

皆様も是非 www.dataranking.com をご覧になって、スウェーデンと日本を比較してみてください。ストックホルム商科大学の鈴木准教授が監修した国別、項目別の国際ランキングで、これを見ると日本の国際的な地位が一目瞭然で、その低さに唖然とします。人間の良い面、あるべき姿からみたと、日本がスウェーデンを超えるものは何もありません。一例はODA(政府開発援助)で、スウェーデンはGDPの1%を貧困国救済にあて、世界でトップです。日本は0.28%、世界で22位とくらべものになりません。しかもスウェーデンは100%無償援助、人道支援中心なのに日本は50%がローンで建設土木中心です。

3. スウェーデンのプライド

プライドは人間である証です。人権尊重とは、とりもなおさず個人のプライドを尊重することです。スウェーデンの痴呆老人や身障者のケアの仕方、および子供たちへの対し方をみていると、いかにプライドを損ねないように、プライドを重んじようとしているかがわかります。日本のデイケアセンターで遊戯をさせられている老人を見ていると、まだまだ道は遠いと思わざるを得ません。個人のプライドを尊重する国であれば当然、国にもプライドがあります。次の図を見てください。

スウェーデンの温室効果ガス削減目標



出典: The Swedish Report on Demonstrable Progress, Ministry of Sustainable Development

これは京都議定書が各国に求めた温室効果ガスの削減目標とスウェーデンの対応を示したものです。議定書のスウェーデンに対する要求は90年度比プラス4%（図中グラフの上、緑色）でした。日本はマイナス6%です。ほとんどの国がマイナスです。この決定にスウェーデンは不満足で、議定書とは別にマイナス4%（図中グラフの下、青線）と国会で決議してしまいました。国連の会議がスウェーデンにはもっとCO2を排出しても良いと公認しているのに、何故わざわざ負担の重くなる方向に決議をするのか。このような決定をしたのは世界中でスウェーデンだけです。国の政策担当者はその理由を小声で”スウェーデンのプライドだよ”と言います。

このプライドは、先述のODAを始めスウェーデンがとるあらゆる政策に現れています。スウェーデンの政策担当者は“目標を低くすれば、低い結果しか得られない”と度々口にします。国が持つプライドは、国が抱く志でもあります。日本の志と日本人のプライドは何処へ行ってしまったのでしょうか

4. 日本のとるべき道

私はここ10年以上、毎年チャルマース工科大学の経営大学院のビジネスマン相手に、「日本文化と産業」について講義を続けています。生徒であるスウェーデンビジネスマンが知りたいのは、日本人のものの考え方と態度の裏にある動機です。そこで日本の歴史を紹介することが必須になります。私から見ると日本の歴史は、優秀な生徒で真面目に学ぶ生徒の歴史にほかなりません。私は日本の歴史、すなわち生徒としての歴史と修得した内容を次の3段階に分けて彼らに説明しています。

- 第一期：仏教、儒教、漢字の伝来から黒船襲来まで、韓国、中国が先生の時代
- 第二期：ペリーの黒船から敗戦でマッカーサーが来るまで、ヨーロッパが先生の時代。
- 第三期：マッカーサーの占領軍から今まで、アメリカが先生の時代。

このことを別の言い方をしてみます。すなわち日本人は4枚の上着と着物を着ています。一番上に着ている上着はアメリカ製で、布地は民主主義、税制、教育制度、などでできています。この上着は新しく軽いので、必要なときにすぐ脱いでしまいます。その下にはヨーロッパ製の着物を着ています。縦糸、横糸は法制度、軍隊、芸術、科学、思想、技術などなどです。しかし時に応じて脱ぐことがあります。その下に着ているのはもっと厚くどっしりとしている、韓国・中国製の着物です。儒教、仏教、道教などで染めてあります。これはなかなか脱ぐことはありませんが、例えば工場を新築したときなどには脱いでしまいます。その下にまとっているのが、日本製の着物です。その材料は、アニミズム、神道でできています。これは日本人の身体に密着していて脱ぐことはありませんし、出来ません。通常、日本人は、日本に来る外国人ビジネスマンには、アメリカ製の上着か、せいぜいヨーロッパ製の着物を着ている姿しか見せません。でも何かのときに、中国・韓国製や日本製の着物を見せることがあります。この時外国人はそれまで理解していた日本人のイメージが崩れ混乱します。

これらの着物、すなわち日本製を除いた3枚の着物は、日本人がその時々先生から熱心に学んで作り上げたものです。日本人の特質は極めて真面目で、誠実で、熱心な生徒でありうることです。この世界に類をみない特質を忘れて、なまじ先生になろうとすると必ず失敗します。韓国、中国侵略がそうですし、80年代の驕り“Japan as No 1”がそうでしょう。今の日本の地盤沈下はアメリカを先生とする時代が終わり、それに代わる先生を見つけられないからではないかと思えます。

日本人は先生の器ではありません。また、先生に対して人格的に対等であることも苦手のようです。すなわち、これからも誠実な生徒であり続けることが日本人の美徳ではないでしょうか。先生ではなく誠実な生徒として国際交流と国際貢献につくすことが、日本のとるべき道だと信じます。それではアメリカの後で誰を先生とすべきか。もうお分かりとおもいますが、スウェーデンを含めた北欧です。これが私が40年間コミットしてきたスウェーデンに関する結論で、40周年を迎えこれからも(社)スウェーデン社会研究所をより良い学習の場として行きたいと思えます。

第65回 ヴァイキングから今日のスウェーデン人へ
—— 現代のスウェーデン人になった理由

ブレインプラス合同会社代表
工学博士
ヨハン・バンション

私(ヨハン・バンション)は1991年に初めて日本に足を踏み入れたときにこの国に興味を持ち、以来10年間日本に滞在して活動を続けてきている。日本での経験を積むうち、私は自分の母国であるスウェーデンと日本の間に多くの共通点があることを見出すとともに両国の違いにも気付いた。本日は最後にそのお話しもしたいと思うが、まずは講演の主題である「ヴァイキングから今日のスウェーデン人へ—現代スウェーデン人になった理由」についてお話しする。話の組み立てとしては「スウェーデンの歴史」、「スウェーデン人の性格」そして「スウェーデンと日本の類似点と相違点」という順序でお話ししようと思う。

スウェーデンの歴史

スウェーデンが世界史に登場してくるのは、8世紀から11世紀のヴァイキングの活動からである。ヴァイキングは優れた技術による武器と造船・航海術を持ち、700年から約300年間にわたってヨーロッパの各国を襲ったり、商取引をしたりしていた。当時のスカンジナビアは小国が乱立して争いが絶えなかったため、敗れた男達は一旗揚げるためにヴァイキングになることが多かったのである。スウェーデンのヴァイキングはデンマークやノルウェイと違って主に東に向かい、バクダッドまでも勢力を伸ばした。ヴァイキングにとって宗教は重要な存在であった。ヴァイキングの神々は悪と戦うために人間の協力を必要としていて、勇敢な戦死者は天国(ヴァルハラ)へ行き神の軍に入ると信じられていた。戦いに強いことは神から与えられた美徳であり、掠奪は悪いことではなかった。そのためヴァイキングは死を恐れずに戦うので強くなり、恐れられた。しかし掠奪を行った西欧諸国からキリスト教の感化を受け、他の国も強くなるにつれスカンジナビアの内部も落ち着き、12世紀にはヴァイキング時代は終わった。

14世紀のスウェーデンは、国王の王族間による内乱の時代であった。16世紀にグスタフ・ヴァーサが国王となって国を統一、スウェーデンは強国となった。グスタフ・ヴァーサは当時ヨーロッパ北部で広まったマルチン・ルターのプロテスタントを国教に取り入れ、自ら教会の主権力者となった。国王は彼の権力を強化するためプロテスタントを利用したのである。

17世紀のスウェーデンはカール11世が専制君主として権力をふるい、ヨーロッパで起った30年戦争に参戦した。カール11世は宗教上の理由だけではなく、バルト海の領土と通商権を取ることを目的に30年戦争に参戦したのである。この時期にスウェーデンは歴史上最も広い領土を確保し、ノルウェイ、デンマーク、フィンランドの多くの部分がスウェーデン領となった。

しかし18世紀に入るとロシアが力をつけて強国となってくる。そしてスウェーデンはノルディック戦争で敗北するとフィンランド湾南岸を喪失し、大国の地位を降りていった。国王の権力も低下し、カール12世の死後は議会在が国の権力を握るようになる。一方、国内的には平和な時代で、フランス、イギリスから自由主義の思想が、そして文化面では科学、文学、演劇、オペラなどが入ってきて盛んとなる。この時期、植物学のリンネ、物理学のセルシウスなど多くの学者を輩出した。

19世紀のはじめ、ロシア、フランスとの戦争で敗れたスウェーデンは、フィンランドの独立を認めるとともに、国王にはフランスからベルナドットを招く。以来スウェーデンは対外的には中立を保ち、約200年戦争をしていない。国王は依然として公式上の権力は持っていたが、以前のような専制ではなくなり、国政は貴族、聖職者、市民、農民からなる議会在が権力を持つようになった。

19世紀には、誰もが同等の自由と権利を持つべきだという自由主義思想が広まり、言論の自由、選挙改革、法の

改正、独占禁止法、外国からの投資の自由化、教育改革が行われた。一方、社会環境としては、人口が50年間で2倍に増加すると同時にひどい凶作に見舞われたので、国民は極めて貧しく、世紀前半頃は国中が貧困に喘いだ。

スウェーデンはヨーロッパ各国に比べて産業革命に出遅れたが、19世紀末になると産業は大きな発展をみせる。鉄鋼と森林がスウェーデンの最大の資源であった。ノーベル、ボルボ、エリクソン、SKFなどの大企業が相次いで出てスウェーデンの産業を支えた。

20世紀のスウェーデンは、平和を維持する中で多くの点で変化した。世紀初頭、人々は国会や政府に下から影響を与え、民主主義による国民運動がますます盛んになる。産業では工業が発展し、地方からは多くの人々が都市に移住した。普通選挙と議会主義が導入され、社会民主主義が優勢となり、貧富の差は縮小、女性の権利が増大した。病院や学校がつつぎと建設され、かくしてスウェーデンモデルといわれる現在の福祉国家が出来上がった。

スウェーデン人の性格

スウェーデン人の性格について述べてみよう。

まず、スウェーデン人の性格を特色づける5つのキーワードを挙げ、以下のそれぞれについて説明する。

5つのキーワードとは、(1)独立・自立志向(Independence)、(2)集団志向(Collectivistic Mindset)、(3)感情より理性重視(Reason not Emotion)、(4)正直(Honesty)、(5)自然愛好(Love of Nature)である。

(1) 独立・自立志向(Independence)

スウェーデン人は、ひとりひとりをとってみると独立・自立志向である。各人は社会生活においては公と私の区別をはっきり分け、個人的には周囲からの影響を受けることなく自分らしい生き方をすることを好む、このことはスウェーデン人が他人との付き合いにおいて、人に借りをつくることをできるだけ避けようとする性格の中に表れている(これは親子の間にあっても同じ)。この独立・自立志向は、昔から広大で厳しい自然環境の中で、少ない人口がひとりひとり散ばって生きてこなければならなかった歴史的背景もあるであろう。

(2) 集団思考(Collectivistic Mindset)

一方、人との社会生活における公の面では、スウェーデン人は集団志向である。スウェーデン人は自分の属する社会で意思決定するときは、関係者が皆で論議する。そしてその結果、多数の人が賛同して決まったことには全員が従う。すなわち社会生活においてはコンセンサスを重視するのである。

(3) 感性より理性重視(Reason not Emotion)

スウェーデン人は、できるだけ事実にもとづいて考え、結論を出そうとする。従ってものを考えたり議論するときは、感情を交えないことを良しとする。ただこの性格は必ずしもセールスマンには向いていないと言える。

(4) 正直(Honesty)

スウェーデン人は他人に対し、自分の考えや情報を隠さず、正確に公表するという点で「正直」である。スウェーデン人は、うそは勿論のこと、誇張も嫌う。これはヴァイキング時代からの伝統である。スウェーデンの「正直」は、16世紀以来のプロテスタントがもたらした個人主義(神の前では全てが自己責任)のモラルからも大きな影響を受けている。この「正直」があるので、スウェーデンでは国民は政府を信用し、政府も国民を裏切らず、高負担高福祉の社会が築けた。

(5) 自然愛好(Love of Nature)

スウェーデン人は少ない人口が広大な土地に住んでいるので、必然的に人々は自然に囲まれた環境の中で育っている。従って自然に対する愛着がことのほか大きい。

スウェーデンと日本の類似点と相違点

スウェーデン人と日本人は、性格的な面において内向的なところ、感情を表に出さないところ、人との対立を望まないところ、コンセンサスを重視するところ、勤勉なところなど類似点が数多くある。地理や歴史的にみても、両国とも大陸の極北と極東に位置して孤立しており、独自の言葉を話すこと、また西欧に遅れて工業化が始ったにもかかわらず現在は強い産業をもち、教育レベルが高い、など大変よく似ている。

国民性としては、両国とも集団志向であるところは表面的には似ているが、個々にみるとスウェーデン人は個人主義であり、日本人は集団主義でかなり違うところがある。コンセンサスを重視するといってもスウェーデンでは事実をもとにして議論する方法をとるが、日本の場合は議論より全体として情緒的な解決にもっていくことが多い。

両国民とも社会的モラルは高いが、日本とスウェーデンの違いは、日本人は人の目の届かないところでは規則違反や公のモラルに反する行いをするところがある。

スウェーデン人は大半が政府を信用しているが、日本人は政府を信用していないようだ。

第66回 スウェーデンから見た日本 —— ジャパン・コネクションを探る

国際ジャーナリスト
土野 繁樹

土野氏は同志社大学、米国コルビー大学を卒業、TBSブリタニカで「ブリタニカ国際年鑑」編集長、「ニューズウィーク日本版」編集長など、国際的なジャーナリストとして活躍してこられました。現在はフランスに在住しながら、月刊誌「ふらんす」に随筆「ドルドーニュ便り」を連載中です。（通常は、講演から編集部が原稿を起こすのですが、土野氏はご自身で執筆してくださいました）

軽業師とヒヨコ鑑定士

ストックホルムの娘のアパートの書架を眺めていたら、岩波文庫の『米欧回覧実記』が目に入った。これは岩倉具視を代表とする130年前の明治政府視察団の記録である。なにげなく頁をめくっていたら、「端典（スウェーデン）国の記」という章があるのを発見した。そこには1873年初春のストックホルムに滞在した使節団の一週間の足跡が記録されていた。

文庫本で20頁の短い記述だが、はじめの10頁は百科事典の国項目のような内容である。冒頭に“端典国は、那威（ノルウェー）国と合同して、一王を奉ず”とあり、当時は合同王国であったことがわかる。その国民性は“古事に於いて、獐猛にて殺伐を好み、海賊寇略を事としたり、今に至るまで、風俗甚だ剛毅”とある。スウェーデン人はバイキングの末裔で、いまでもその気質を受け継いでいると説明しているのである。歴史も地理も要領よく概略が書かれていて、貨幣（グローネル＝クローネ）についての記述も詳しく、交換レートまで書かれてある。人口は425万492人、馬が42万8000匹、豚が33万4000匹などの詳細な数字はスウェーデン政府の統計を流用したものだろう。

岩倉一行は4月23日コペンハーゲンからマルメに船で到着しているが、その日この視察団の記者は、スウェーデンにはじめて来た日本人は、軽業師であったと書いている。明治維新の後、横浜あたりの西洋人にその腕を買われてサーカス団に入り、スカンジナビア各地を巡業していたのだろうか。フランスの作家ジュール・ベルヌの『80日間世界一周』にも主人公の従者が横浜で一文無しになって、サーカス団に入るという場面があるが、当時の欧州での日本人のイメージはサーカスの軽業師というイメージだったようだ。

余談だが、岩倉ミッションのスウェーデン訪問の研究をしているヨッテポリ大学のエドストラム教授によると、日本からの派遣団の滞在費はすべてスウェーデン政府がもったという。王宮での歓迎晩餐会の席で、伊藤博文は隣のスウェーデンのプリンセスに、一言も口を聞かなかったという記録もあるから、あの社交的な伊藤も当時の外交マナーは失格だったようだ。

岩倉一行のマルメ到着から100年後の1973年に、同じく海路でわたしはマルメを訪れた。当時の日本の造船業の大攻勢で、競争に敗れたマルメにあるすべての造船所が倒産し閉鎖していた。“あれが使われなくなった造船所よ”とスウェーデン人の船長の娘である妻が沈んだ声で、湾内の大型クレーンを指差したことを思いだす。それを見て、自分がなにか悪いことをしたような気持ちになったものだ。

その頃スウェーデン南部のスコーネ地方で、最もよく知られている日本人は“チキン・ソルテラ”と呼ばれる人々だった。彼らは、鶏のヒヨコの性別を目にも止まらぬ速さで識別する技術（卵を産むメスを選ぶ）をもつ鑑定士の出稼ぎ集団で、ある町では、この元締め日本人が一財産を作って大邸宅に住んでいるという話を聞いたものだ。造船とヒヨコ鑑定、なるほど技術立国ニッポンだなど、ひとり苦笑いした記憶がある。

有名人“消えた日本人”

今回の滞在中、“スウェーデンで一番よく知られている日本人は誰でしょうか”という質問をしたら、面白い答えが返ってきた、中年以上の多くの人が1912年ストックホルム五輪に出場した日本人マラソン選手を挙げていた。その人

は”消えた日本人“として知られている金栗四三(かなくり しぞう)である。

スウェーデン人の中で語り継がれている“消えた日本人”の不思議な出来事は次のようなものだ。マラソン競技があった1992年7月14日、各国選手が次々とメイン・スタジアムに帰ってきたが、ただひとり日本人走者が戻ってこず大騒ぎになる。主催者は警察に捜索願をだしたが、日本人の行方はわからずそのまま消息を断った、というミステリーである。“消えた日本人”の真相はその後明らかにされるが、その顛末の面白さもあり、スウェーデン人の間では、事件から1世紀もたつ今でも彼は昭和天皇、黒沢明などと並ぶ有名人なのである。

1967年の春、金栗はストックホルムのビジネスマンに招待され、55年ぶりに姿を現したのでスウェーデンのマスコミはこのニュースに飛びついた。スウェーデンの代表的新聞ダーゲンス・ニヘテルが“帰ってきた日本人”という見出しで事件の顛末を伝えているので、その記事の要約を紹介してみよう。

「消えた日本人が戻ってきた。彼は55年前と同じように、ペトレ邸の庭でフルーツ・ジュースを飲んでいる。金栗は当時26歳、日本は五輪初参加で、彼は代表選手わずか二人のうち一人だった。マラソン当日は大変な暑さだったことを、金栗は覚えている。他の選手は最初から飛ばしていたが、彼はそのペースについていけなかった。中間地点にきたとき突然めまいがして倒れてしまった。しばらくして立ち上がり歩いていたら、近くの邸宅の庭に迷い込んだ。ペトレ家ではちょうど庭のテーブルでジュースを飲んでいるところだった。当時、11歳だった息子のペンキトが短パンの招かざる客を見つけ、ペトレ家はその客人をジュースでもてなした。その後、金栗はペトレ夫人の寝台で一休みして、主人の背広を借りて電車にのってストックホルムに戻り、翌日、五輪関係者に報告をせず姿を消した。それが真相である。55年後、ペトレ邸を再訪した“消えた日本人”はペンキトとその日と同じジュースを飲んで乾杯した」

記事にはその日は暑くて途中で放棄するランナーが他にもいたとあるので、完走できなかったのは金栗だけではなかったようだ。金栗が消えてしまった理由を、記者は「東洋では面子を大事にする。完走できなくあわせる顔がない、と思ったのではなかろうか」と推測している。

わたしの年配の知人は1967年に金栗がオリンピック・スタジアムを再訪したときの新聞写真のことを憶えていた。あとで調べると、写真には「彼は54年8月6日32分20・3秒をかけてマラソンを完走した。これは世界新記録である」とユーモラスなキャプションが付いていた。金栗は大歓迎を受け、国王の弟プリンス・パーテルとの接見もしている。

エクスペレン紙によると、日本の駐在武官が金栗をペトレ家に引き取りにきてストックホルムに帰ったとあるので、警察など関係者は事件の真相を知っていたと思われるが、庶民のレベルでは不思議な日本人の話として語り継がれたのだ。いまなら、主催者に迷惑をかけた男として非難されるのが落ちだが、当時はのどかな時代だった。1912年の五輪には綱引き競技があり、ストックホルムの警察チームがロンドンの警察チームを破り優勝し、それがニュースになるような時代だった。「消えた日本人のストーリーをなぜスウェーデン人は好きなのでしょう？」と、雑誌記者のエバ・ヨハネソンさんに聞くと「面白い話だし、スウェーデン人が好きなフルーツ・ジュースで、彼が元気を取り戻したというのが、いいわね」と言っていた。ちなみに金栗は日本マラソンの父と言われていて、金栗賞は箱根駅伝の最優秀選手に与えられる賞である。

ノーベル賞博物館での発見

12月になるとストックホルムの市庁舎で国王、王妃列席の下、ノーベル賞晩餐会が行われる。晩餐会場は青の間と呼ばれている。スウェーデンは人口950万の小国だが、ノーベル賞は、流行りの言葉でいうと、この国の最高のソフトパワーだと思う。わたしは、ストックホルムを訪れるたびに、ノーベル賞博物館(元証券取引所を改造したこじんまりした博物館。オーディオ・ビジュアルを駆使したプレゼンテーションは魅力的)に行くのだが、今年の春は、アインシュタイン特別展をやっていた。彼の生涯の歩みの展示のなかに、アインシュタインはなんどもノーベル物理学賞の候補に上がったが、選考委員会内部で意見が割れて受賞したのは15年後であった、ということが紹介されていた。「相対性原理は宗教である」と断固反対する物理学者の委員の手紙の展示もあり、天才もすぐには認められなかったことが分る。展覧会で彼が大変な亭主閑白であったことも発見した。二度目の妻と結婚にさいして“3度の食事は書齋に”、“旅行に一緒に行くことは求めるな”など妻が従うべき項目が書かれた手紙があった。これを見て、一昔前に流行った、さだまさしの歌”閑白宣言“などやわなものだ、と思ったものだ。

アインシュタインは1922年の秋、当時の日本の出版社・改造社の日本講演旅行の招待を受けて客船で神戸にむかっていたときに、ノーベル賞受賞の正式通知を受けている。彼は船中で選考委員長宛に“受賞を名誉に思う”との礼状を書いているが、そのドイツ語で書かれた手紙のレターヘッドは日本郵船の北野丸とあった。わたしはアインシュタインのジャパン・コネクションを発見して愉快だった。

1922年の来訪でアインシュタインは日本が大好きになったようだ。当時の日本人の克己心ややさしさに心を打たれたのはたしかだが、彼が最も感銘したのは、日本の自然と芸術だった。アインシュタインは「日本では自然と人間が一体化しているように見える」と言っている。彼が現代日本を再訪したらなんと言うだろう。日本ではビジネスと人間が

一体化している、テレビと人間が一体化している、と嘆くかもしれない。

わたしはノーベル博物館を訪れるたびに、ノーベル財団の日本受賞者に対する扱いは好意的だと思う。多くの文学賞・受賞者のなかで大江健三郎が国王からメダルを受け取る場面がビデオで流れている。数年前、ストックホルムの町を歩いているとノーベル賞博物館の広告ポスターがあり、ヘミングウェイからアインシュタインまで歴代の受賞者15人ぐらいの顔写真があり、そのなかに化学賞のあの“癒し系の人”田中さんの顔も入っていた。数年前の夏、博物館でノーベル賞受賞者何人かの横顔を描く短編ドキュメンタリーが上映されていたが、そのなかに、川端康成をインタビューする40年以上前の三島由紀夫の姿があった。別の場面で、日本についてインタビューを受けた三島はなかなか格調のある英国英語で「日本文化には神経質(nervousness)な要素がある」と言っていたのが印象に残っている。繊細な神経(sensibility)と言わずに神経質(nervousness)と使った三島はさすがに鋭い。

寿司ブームとオナカ・ブランド

ストックホルムには、いたるところに寿司屋があり、都館、六本木、玄海、ヘレン、ドラゴン・・・と150軒はあるのではなからうか。人口当たりにする欧州の都市では一番多いという。30年前には数軒しかなかったから、隔世の感がある。若者のグループがやっているインターネット・サイトにSUSHIというのがあり、新しい店、お勤めの店などの情報と提供しているから、寿司はストックホルムで完全な市民権を得ていると言っていいだろう。スーパーでも寿司パックを売っている。

ある地下鉄駅の階段入り口の脇に4坪ぐらいの寿司屋があった。数人の若い女性が味噌汁と握りを旨そうに食べているので、窓越しにメニューを見ると、定食は芸者、侍、将軍、相撲の4種類があった。相撲メニューが、ボリュームがあり値段が一番高く145クローナ(2000円)で、握り12個と巻き5つが付くと書いてあった。日本はまだ大衆レベルでは、芸者、侍、将軍、相撲の世界なのだとうんざりしながら、握っている人を見ると、野球帽をかぶったフィリッピン人らしき青年だった。その手伝いをしているのはスウェーデン人の若者と韓国人らしき女性で、壁にはキリストの小さな画がかかっていた。大多数の店は日本人の寿司職人ではなく、アジア出身の外国人が握っている。

滞在中に数軒のサラリーマンやOLが入っている寿司屋をのぞいてみたが、まああの味であった。ネタはなんと言ってもスウェーデンが好きなシヤケが中心だった。中心街にあるレストラン・ビルの2階に大きな寿司屋(50人収容)が入っていたが、入り口に日本らしさを演出するために、日本語の看板がかかっていた。“秘密厳守”などと書かれている武蔵小杉駅ちかくの探偵社の広告だった。どこで、手にいれたのかわからないが、これには戸惑った。この店で寿司を握っているのはインド、パキスタン系の若者であった。

寿司ブームは、グローバル化の象徴みたいなものだが、日本経済が日の出の勢いであったころの象徴のような食品ブランドがある。いまから20年くらい前だろうか。わたしは、南部の小さな町のスーパーで買い物をしているときに、大きな字でONAKAと書かれているヨーグルトを見つけたのである。ONAKAはまさしく腹のことで、カートンには“日本人はおなかに精神がやどっていると思っている・・・これを飲めば心身ともに健康になる”と書いてあった。日本の工業製品はハイ・クオリティのシンボルで、世界を制覇しつつあった時代だったので、その評判に乗じてヨーグルトにONAKAと命名したのだろう。今回、滞在中にいくつかのスーパーで買い物をしたが、ONAKAヨーグルトは健在だった。ブランドが定着しているとの印象だが、カートンから、おなかと精神の関係は消え、“日本の酵素をつかっている”との短い説明だけがあった。

食べ物に関する最新のジャパン・コネクションをご紹介しよう。いまこの町の食通の間で流行しているのは、なんと日清製粉の“パン粉”である。新聞にもパン粉の広告がのっていたが、一流のレストランは日本製のパン粉を使っていることを宣伝し、個人のパーティでは、これを使うのが格好のよいことになっているというのだから面白い。パン粉で貢献するニッポンである。

スウェーデンのイスラム移民

わたしが始めてスウェーデンを訪れたのは、30年以上前だが、その頃と今となりが一番違うかということ、移民の存在だ。ストックホルムの中央駅には移民とその2世と思われる人々が溢れていた。30年前にもエチオピアやハンガリーからの難民に会ったことはあるが、大きな存在ではなかった。しかし、今度の滞在中、新聞・テレビは毎日のように移民とその2世の問題について報道していた。

スウェーデンの移民人口は1970年に4%だが、2005年には16%(総人口950万のうち150万)と急増している。そのうち国籍を取得したのは12%だから、経済だけでなく政治へのインパクトも大きく、昨年8月は総選挙のキャンペーン中で、アラビア語で社民党へ投票を呼びかけている地下鉄の広告を見て驚いた。

新しいスウェーデン人と呼ばれる彼らは、多くの国から来ているが、最近は半分以上がヨーロッパ以外の国の出身

者だ。その多くが、戦火と迫害を逃れてきた政治難民とその2世である。昨年10月に、総選挙で野党連合が勝ち政権交代があったが、移民・統合大臣になったのは11歳のときにアフリカのブルンジから来て国籍をとった30代の女性だった。これなど、いろいろな問題もでてきているなかで、移民政策の成功例だろう。日本ではちょっと考えられないことである。

スウェーデンの南の都市マルメは人口50万の港町で、外国生まれの市民が人口の34%にもなっている。最近では、旧ユーゴスラビア、イラク、ソマリアからの移民が増えているようだが、これらの国はいずれも戦争で難民をだした国である。スウェーデンは第二次世界大戦中から、人道的な立場から政治難民の受け入れに積極的で、ナチスの迫害を逃れてきたユダヤ人、ベトナム難民、イラク難民まで、世界の駆け込み寺みたいになっている。昨年だけで8100人の政治難民を受け入れている。ちなみに、昨年、滞在許可を得た外国人は62000人(80%が永住許可)で、そのうち13%が政治難民だ。

イラク戦争が2003年に始まって以来、スウェーデンはイラクからの政治難民を受け入れているが、2007年だけで2万人になると予測されている。その数を日本の人口で換算すると25万人になる。スウェーデン人の心の広さには感嘆するばかりだ。アメリカはというと2007年8月までに僅か685人である。これはアメリカの恥ではないか。

日本の政治難民受け入れは、どうなっているのだろうかと思い調べてみると、1982年に国連難民条約に署名して以来、昨年まででわずか320人である。この数字をみると、日本は緒方貞子さんという素晴らしい国連難民弁務官をだした国なのに、政府の対応は、原則ヒトは受け入れない鎖国政策で、江戸幕府なみと言っていいたいだろう。

スウェーデンは移民・難民に関して多文化主義(マルチ・カルチュラリズム=少数民族の文化・宗教・言語アイデンティティを維持しながら、融合をすすめる政策)をとっている。これを具体的政策で言うと、新しいスウェーデン人に市民として同等の権利を与えながら、出身国の文化を維持する機会を政府が提供している。モスクやイスラム・センターに補助金をだすだけでなく、学校では移民2世の母国語を教えている。今では予算不足で大幅縮小になったようだが、わたしの義理の兄(前県副知事)の話によると彼の県では、60ヶ国語を教える教師を準備しなくてはなかった、と言う。

わたしは、ストックホルム滞在中にイスラム移民の町があるというので、訪ねてみた。たしかにアラブ、アフリカ系の人ばかりだが、平均5階建てのアパートが立ち並んでいて、公園もあり環境としては悪くない。日本の都会ならどこもあるアパート群で、低層なので、こちらのほうが住みやすいくらいである。ひとつ気付いたのは、アパートが汚れていて、スウェーデン人が大好きな花壇など、どこにもない。

同国人でも価値観、ライフ・スタイルのちがいは摩擦の原因になるが、異民族、異文化間の場合、その度合いは大きくなる。その上、宗教がからむと問題はより複雑になるだろう。一昔前までは、ほぼ単一民族で文化・伝統がはつきりしていたスウェーデン社会が、急激に移民・難民を受け入れたため、混乱がおき、治安、同化の問題が浮上している。

ストックホルムで暮らす友人のジャーナリスト、オーレ・ロザンダさんにスウェーデンの移民政策について尋ねたら、彼は「義務教育でスウェーデン語を学ぶのにちゃんとしゃべれない、社会に融合しない新しいスウェーデン人が増えている」ことを嘆き「政府は大失敗をした」と激しく批判していた。私はストックホルム滞在中に美術館、博物館めぐりをしたが、入場料無料なのにアラブ、アフリカ系の訪問者はほとんどいなかった。このことから多文化主義の限界を感じ、世界に向かって最も開かれた国スウェーデンも、移民政策の転換をせまられている、と思ったものだ。

スウェーデンと日本の状況は違うが、高齢化、少子化が進む日本は、経済活性化のために外国人労働者が毎年数十万必要だといわれている。そのための総合的な移民政策が必要だろう。

岩倉ミッション、消えた日本人、寿司ブーム、ノーベル博物館、イスラム移民と異なるテーマのバイキング料理のようになりました。お口に合いましたでしょうか。なかなかおいしい国ですので、機会があればぜひお出かけください。

第67回 平和構築 スウェーデンの貢献と日本との協力

一橋大学 法学研究科
客員教授
中満 泉

私(中満 泉)は、大学を出てから20年、海外において主として国際機関で難民、紛争解決、平和維持に関する仕事に携わってきた。その間、スウェーデン人の夫との関係で、5年間スウェーデンの国際機関にも勤めた。現在は一橋大学で教鞭をとっているが、(専門分野は「平和構築」)今日は、私の経験を踏まえて、学生の講義とは違った形で、国連の平和構築やスウェーデンがどうかかわっているか、などについてお話ししようと思う。

話の構成としては、1 「平和構築」「国際平和協力」とは何か。2 スウェーデンはどのような貢献をしているか。3 「冷戦後の平和協力」の課題。4 「日本の課題と今後の協力の可能性」という順序にてお話しするつもりである。

国連平和維持(PKO)活動の誕生

世界における平和維持活動は、主として国連を中心に行われているが、国連の平和維持を目的とした活動は、1948年にフォルケ・ベルナドッテ伯(スウェーデン)が国連休戦監視機構を設立したことに始まる。ベルナドッテは最初の国連調停官となって、パレスチナとイスラエルの停戦に貢献するとともに、1949年に国連インド・パキスタン軍事監視団を組織し、停戦に尽力した。

国連の平和維持活動を本格的に立ち上げたのは、第2代国連事務総長となったダグ・ハマーショルド(スウェーデン)である。彼は1956年に第一次国連緊急隊UNEFを設立。スエズ危機、コンゴ動乱の停戦に命をかけた。ハマーショルドは「国連PKO活動、生みの親」といわれている。

国連PKO活動は、二人のスウェーデンのファウンディング・ファザーズによって立ち上げられたわけであるが、それではこの活動は国連憲章のどこに記載されているのであろうか。実は、国連憲章のどこにもそれは規定されていないのである。

ハマーショルドの業績と人となり

国連PKO活動の生みの親といわれるハマーショルドは、どのような人物であろうか。彼は1905年、スウェーデンのヨンショッピングに生まれた。国連において国連事務総長になると、米国と中国の対立の中間に立ち、1954年、中国から11名の米軍人捕虜の解放を果たした。1956年、スエズ危機が始まると、UNEFを設立、その平和活動ではソ連と対立したが、西側諸国と中小国からは大きな信頼を寄せられた。1961年、コンゴ和平調停活動中に飛行機事故で殉職。この事故には今でも陰謀説がある。哲学、抽象絵画などにも造詣が深く、俳句への理解の深い文人であった。

今日の国連平和維持活動

1948年から始まった国連の平和維持活動であるが、現在ではその活動範囲は非常に広いものとなっている。国連の平和維持活動は三つの柱からなっている。

- 1 紛争の予防(紛争への介入、和平活動)
- 2 平和の維持
- 3 平和の構築(民主化、民族対立や格差の解消)

1948年以来、国連では合計61のミッションを展開してきた。2007年8月現在、行われているミッションでは、軍人を含むミッションが16、その他(軍事部隊を含まない)平和ミッションが3、合計19のミッションが展開されている。その国連の平和維持活動がどのくらいの規模で行われているか、具体的な数で示す。

・19の平和協力ミッションで働くスタッフ総数 (文民、軍人、警察を含む)	102,619名
・軍事部隊要員	71,069名

・軍事監視員(非武装)	2,459名
・文民警察	9340名
・1948年以來の殉職者数	2,392名
・1948年以來の平和活動への出費	約470億ドル=約5兆円
・平和活動2007~8年予算	約50億ドル=約5360億円

スウェーデンの国連平和活動への貢献

スウェーデンは、二人の国連平和維持活動のファウンディング・ファザーズを生んだことでも分かるように、国として国際平和活動への関心が高く、積極的である。従来から、スウェーデンがどのくらい国連平和維持活動に貢献してきたかを数字で示そう。

- ・1948年以來、のべ約80,000万人の軍人が国連平和維持活動に参加
- ・2006年、合計946名のスウェーデン軍人が15のミッションに参加
- ・65名が殉職

スウェーデンの平和活動は、ますます幅広く積極的になってきているが、最近の代表的な活動としては、アフガニスタン国際治安支援部隊(ISAF)への参加がある。ISAFはボン合意によって設立が要請され、安保理決議1386によって設立。NATOの指揮下で、NATO加盟国26カ国、非加盟国11カ国、計約33,000人が活動している。スウェーデンはISAFに要員を派遣し、現在、約350名の軍事要員がマザリ・シャリフ(アフガン北部地帯)に展開、治安支援を行っているほか、地方復興チーム(PRT)を指揮、民生復古の支援を行っている。そのほか、ISAF以外にも、EU警察支援ミッションに文民警官を派遣したり、スウェーデン・アフガニスタン委員会の活動を行っている。

冷戦後の平和協力の課題

1990年代に冷戦が終わってから、世界で起きる紛争は多様化、グローバル化し、それにもなって国際平和活動も変化を求められている。いくつか例を挙げると、

- ・紛争の処理から紛争の解決へ
- ・軍事介入が国連PKOから多国籍軍による強制活動へ
- ・民主支援目的から広義の安全保障確保へ
- ・国民の支援から国家(再)構築支援へ

といった変化である。なぜこのような変化が必要かといえば、最近では武力による紛争を従来の方法で一時的に停止させたとしても、紛争地域における治安の確立、人権の安全保障、国家形成(再構築)、経済の発展(貧困からの解放)などがなされなければ、紛争は再発し、真の平和は実現しえなくなっているからである。これらの変化にどう柔軟に対応していけるか、これがこれからの平和協力における課題である。

日本の貢献

ここで日本の国際平和活動について述べよう。

日本は平和活動でどのくらい国連に協力しているかといえば、1992年に国際平和協力ができ、これに基づいてこれまで、述べ5700名を現場に派遣してきた。2007年9月現在、計38名を国連PKOに派遣している(軍事要員30名、軍事監視員6名、文民警察2名)。ただ現在、日本には派遣に対して参加5原則という厳しい縛りがあり、アフガニスタンのような危険の高いところへは派遣できない。

日本の持つ課題とコンゴの協力の可能性

日本の平和活動における最大の課題は、国際平和活動の多様化に対応ができていないことである。その原因としては、日本は第二次大戦で敗北し、アメリカ占領軍のもとで作られた新憲法でうたわれている戦争放棄が、多くの国民に支持されていること、戦後の日本の政治や社会風土の影響など色々挙げられる。が、私が日本の外側から見た印象としては、日本の平和構築、平和協力で遅れているのは、この分野での人材の決定的な不足である。平和活動への人材の育成に対する日本の人事政策(政府、民間企業を含む)の柔軟性のなさは目を覆うばかりである。

日本は経済大国であり、先進国のひとつとして平和化つどもっと参加して欲しいと、世界から要望が寄せられている。日本において優れた人材の育成ができたならば、日本のみならず、十分に活用されていない途上国の知見を掘り起こすことが可能である。

また、人材の育成ができれば、東洋の日本と西欧のスウェーデンは、多くの領域で協力できる可能性が出てくると思う。

私は日本人が得意な東洋的なコンセンサスアプローチと、スウェーデン人の得意な西欧的なアクティビズムが協力し合えば、政策的にも知的にも、世界平和に大きな貢献ができると考えている。日本は一日も早く、国際平和協力を

積極的に参加できる体制を持った国になって欲しいと、私は願う。

(講演抄録文責 JISS所報編集部)

Copyright (C) 2007 Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Reserved.

ニッケルハルパnyckelharpaに魅せられて

日本ニッケルハルパ協会 会長
鎌倉 和子

スウェーデンの伝統楽器ニッケルハルパ

「ニッケルハルパを知っていますか？」

日本で「知っている」という答えが返ってくることは滅多にありません。ではスウェーデンでは皆知っているかという、そうでもありません。

スウェーデンに留学して間もなくのころ、ストックホルムの地下鉄に乗っていた時のことです。背負っていたニッケルハルパを「それは何？」とスウェーデン人に聞かれて「ニッケルハルパです！」と答えたら、「知らない」と言われて驚いたことを思い出します。連れの友人が知っていて、その人から説明を受けると、私には「遠い日本から学びに来てくれて有難う！」と言ってくれました。

学校に戻ってその話をしたら、あっさり「そうね、民族音楽はメジャーの文化じゃないから知らない人も多いのよ」と言われました。でも国民みんなが使っている50クローノルのお札の絵は、表が美しいオペラ歌手で、裏はまさしくニッケルハルパなのです。知らない人がいるなんてと思いましたが、実は「忘れ去られないように」お札に印刷されたのだから後から聞きました。

ちょうど津軽三味線が津軽地方で傳承されて、他の地方の人にはあまり知られていなかったように、ニッケルハルパも傳承されてきた土地ウップランド以外の人にとっては珍しいものだったそうです。現在は、少なくともスウェーデンの民俗音楽に興味を持つ人はその存在を知り、多くの若者が演奏するようになってきています。ちょうど、日本で大晦日の紅白歌合戦で津軽三味線が演奏されて若い人に人気が出てきたように、それを“カッコいい”と思う人も増えてきたのです。



※ニッケルハルパを弾く著者

ニッケルハルパとの出会い

私がニッケルハルパと出会ったのは、ちょうど10年前のことでした。

私は学生時代から民族舞踊研究会というサークルに所属し、世界各国のそれぞれの独特のダンスや音楽のリズムに魅かれていました。そして縁あって結ばれた夫と共に、卒業後も社会人のサークルで同じ活動を続けていたのです。そこでは毎年いろいろな国の指導者が招聘され、自国の文化として傳承されてきたダンスが紹介されるのですが、その一つに1997年のスウェーデンの民俗舞踊の講習会があったのです。

その折、ダンスの指導者として来日した野口雅彦さんとお会いしたのです。野口さんはスウェーデン在住30年になる方で、ニッケルハルパを弾かれ、スウェーデンのポルスカダンスの研究者です。彼が、「この楽器は、今まで一度も弦楽器を弾いたことがない人でも弾ける面白い楽器ですよ。誰かやってみてほしい人はいませんか？」と言って弾いたニッケルハルパの音色の素朴な優しさに、私はすっかり魅了されてしまいました。

当時、すでに15年ほど前からボタン式アコーディオンを弾いていた夫は、忙しい銀行勤めの中、時間を見つけては家で楽しそうに弾いていましたので、私も何か楽器ができればいいのにと常々思っていましたから、迷いはありませんでした。野口さんをお願いして、一台ずつ手作りのこの楽器を私のために作ってもらうことにしましたが、その時は、その出会いが自分の人生を変えるほどの大きなものになるとは夢にも思いませんでした。

ニッケルハルパという楽器

ニッケルハルパは、スウェーデンの古くからの大学町ウプサラを中心としたウップランド地方に伝えられた伝統楽器です。キーフィドル keyed fiddle (鍵盤付きバイオリン) という英語名がある楽器で、下に降ろしたキーを押上げることによって立っている小さな棒が動いて音の高さを決め、短めの弓で弾きます。つまり原理は大正琴と同じで、押して指で弾くのが大正琴、押し上げて弓で弾くとニッケルハルパということです。ベルトがあり、首に掛けて歩きながら弾くことが出来るので、村々で行われる夏至祭の行進などで活躍しています。

【特徴】

その最大の特徴は共鳴弦を持っていることです。16本ある弦のうち実際に弓があたるのは4本で、残り12本は共鳴弦になっています。どの音を鳴らしても対応する共鳴弦からの音と二重になって奏でられるので、いつも深みのある音色が得られます。

また、もう一つの特徴は鍵盤があることでしょうか。現在普及しているニッケルハルパには37本のキーがあり、3オクターブの音を出すことができます。キーを押せば必ず求める音が出るので練習中に不快な音が出ることはありませんし、直接弦を押さえないので指が痛くならないという優れた特性を持った親しみやすい楽器です。

【歴史】

ニッケルハルパの歴史は14世紀にまでさかのぼることが出来ます。その存在を形跡として残すものとしては、スウェーデンのゴットランド島にある1350年ごろ建てられた教会の石のレリーフに、これを弾く人が彫り込まれています。また、1400年代に建てられた各所の教会の壁画にも数多く描かれています。そのような壁画などは、ドイツやデンマークにも所々に残されているのですが、楽器本体は何故かスウェーデンのウップランド地方にのみ伝承され続けたのでした。

鉄鋼業を中心にウップランド地方の産業は栄え、ニッケルハルパも改良されながら発展していったのですが、1900年代中頃以降にはウップランドの老人たちだけが弾く楽器になってしまいました。このころ日本では、国立音楽大学の学長が、ニッケルハルパはいずれ衰亡する楽器だろうと判断して同校の「楽器博物館」にニッケルハルパを取寄せ、今でもそこに、その1台が保管されています。現在普及しているニッケルハルパは、キーを2段から3段にしてピアノの鍵盤と同じにして弾きやすくしたもので、アウグスト・ボリーン August Bohlin(1877~1949)と、ニッケルハルパ中興の祖といわれるエリック・サールストロム Eric Sahlstrom(1912~1986)によって改良されたものです。

スウェーデン留学の経緯

私がスウェーデンでニッケルハルパを学ぼうと決心した理由は、他でもなく日本では教えてくれる先生がいなかったからです。楽器は届きましたが構え方も弓の持ち方も分からないままでしたので、スウェーデンの野口さんに相談すると、あちらには学校があるということです。そこで2001年の夏、はじめて渡瑞してサマーコースに参加したのです。

ウップサラからローカル電車で40分ほど北上したトーボーという村にあるエリック・サールストロム研究所という名のその学校は、上述のニッケルハルパ復興の祖エリックにちなんで作られました。「ニッケルハルパを学ぶことを通してスウェーデンの民族音楽を学ぶ」ことを目的にした学校であり、唯一のニッケルハルパの研究施設であり、またスウェーデン国内のみならずいろいろな国から民族音楽にたずさわる人が集う場所でもあります。

1週間の寮生活を体験した私は、当地の安全性と清潔さにすっかり安心し、それから3年後の2004年に、1年間の同研究所への留学を決意しました。それは、もちろん夫と3人の子どもの理解と協力なしには考えられないことでした。民族舞踊研究を共通の趣味として歩んできた夫婦であったこと、そして私のニッケルハルパと一緒にアコーディオンを弾くことを楽しみにする夫だったからこそ、むしろ本人の私よりも積極的に留学を望んでくれ、後押しをしてくれたのでしよう。

スウェーデンで学んだニッケルハルパ

研究所のクラスメートは、私を含めて14名。アメリカ人の女の子と私以外は全員スウェーデンの若者たちで、皆で助け合う良いクラスでした。

授業のカリキュラムはかなり充実していて、演奏の授業の日の他に、民族舞踊の実技の日、民族楽器の歴史を学ぶ日、音楽理論の日など曜日によって決まっていました。

演奏の授業で楽譜を使うことはありませんでした。先生が弾いては、生徒が弾くという繰り返しを根気強く続けていく民俗音楽の伝承方法で、先生はじっくりと楽譜では表せないものを伝えようとしているようでした。そして少し先を歩いている先輩として「自分の持っている全てを次の世代の人たちに残していこう」という強い意志を持って授業に臨んでいると感じました。

そして、印象的だったのは「民俗音楽を演奏する人は踊りを知らなければならない」と繰り返し言われたことです。身体でリズムをとらえなければ、指先のテクニクだけでは弾けないのです。一人ずつ順番にダンスのために弾くという授業もありました。短いフレーズの繰り返しが多いダンスの曲を、メロディーの音ははずしてもリズムだけは狂わせないようにして長時間弾くのはなかなか大変です。しかし踊り手に喜んでもらえる演奏をすることは、民俗音楽の演奏者としての誇りであり、スウェーデンの演奏者はそれを目指しているようでした。そしてそんな授業の中で生徒たちは、地方ごとに異なるリズムや、複雑なリズムを学んでいったのでした。

民俗音楽を楽しむ人々

スペルマンズ・ステンマ spelmansstamma(演奏家の集い)という民俗音楽の演奏者が、皆で弾くというスウェーデン独特のお祭りがあります。毎年6月の末から8月の中頃までは、週末ごとにどこかで開催されているといってもいいくらいです。民俗音楽ニュースといった装丁の小冊子が毎年発行され、その予定表が載っています。7月の初旬などは殆んど毎日なので、テントやキャンピングカーなどで泊まりながら次のスペルマンズ・ステンマの開催地に移動する人がたくさんいます。特に有名なのはダーラナ地方のビングショー Bingsjö村のステンマで、前日まで誰もいなかった野原が楽器を弾く数千人の人々で埋め尽くされます。

冬は暖かい屋内でのステンマがあります。スウェーデンの冬は早めに暗くなるのでロウソクの灯りが大活躍。電気の蛍光灯で何でも見えるように明るくするなんて野暮なことにはしません。ほの暗いなかで演奏者が弾き続け、曲にあわせて踊り続ける男女のシルエットのなんと美しいことか！外は-20℃だとしても、そこは熱気で溢れています。「何時に終わるの？」と聞いてみたことがあります。すると、嬉しそうに「全員が帰ったら！」と答えてくれた友人の、はちきれそうな笑顔が今でも忘れられません。その夜、私たちが帰ったのは午前2時。まだまだ終わる雰囲気ではありませんでした。

民俗音楽の演奏者たちは、日常的には、町や村にあるスペルマンズ・ラーグ spelmanslagに所属して、定期的に集会所などで一緒に弾いて楽しみ、お互いの技術を磨いたりしています。民俗音楽や民俗衣装を大切に伝承し続けるダーラナ地方などでは、小さな村々にそれぞれのスペルマンズ・ラーグがあり、その村のポルスカと呼ばれるダンスの曲の、特有のリズムやメロディーを伝えて保存していくのに役立っています。ラーグには大小があり、上手なラーグもあればそうでないものもあります。人気のあるラーグはダンスパーティーに出演を依頼され、ダンサーたちは「ストックホルムでオツシャ・スペルマンズ・ラーグ Orsaspelmanslagが演奏するパーティーがあるよ、彼らの演奏でオツシャ・ポルスカ Orsapolskaを踊りたいね」と、出掛けていくわけです。

またこんな楽しみ方もあります。初めて私がそれを体験したのは、2001年の夏、丘の上の小さな教会で行われた、プロの演奏家によるコンサートでした。客席にいる人の多くが楽器を持っているのを私は不思議に思っていました。夜10時に拍手でコンサートが終わったとき、白夜の夕焼けは果てしなく広がるウップランドの畑を赤く染めていました。その夕焼けの中で、教会の外に出た村人たちが持参の楽器を弾き始めます。さっきまで客席にいた人たちです。そこへプロとして弾いていた人たちも加わります。誰かがダンスを踊り始め、次第にその数が増えてきます。そして、いつ終わるともなく弾き続け、踊り続けるのでした。

民俗音楽の温もり

ステンマの時などは、何人かが集まって輪になって、誰かが自分の好きな曲を弾き始めるのですが、誰でもその輪に入って弾けるのです。その寛容さが私は本当に好きです。こちらのグループの弾いている曲は知らないけれど、あちらのは知っていると思ったら、急いでそちらに入って一緒に弾いてかまわないのです。

それから初心者だからという遠慮も無用なのだそうです。最初の頃は「まだ弾けませんから入れません。私が入ったら変な音を出してご迷惑でしょうから」と、遠慮していました。そうしたら、皆がいうのです。「音は多いほうが楽しいんだよ。どんな音だって和音になるから心配なくていいんだ」と。あんまり言われたので、入ってみました。なんと私の変な音なんて、大きな音楽の中に呑み込まれてしまって楽しさだけが湧き上がってくるのです。

あるステンマでのことです。おもちゃのギターを持った男の子がいました。大人たちの演奏に混じって恐る恐るポロンポロンと弾いていましたが、どんなに滅茶苦茶に弾いても大人たちがニコニコしているので、だんだん大きな音でかき鳴らすようになってきました。リズムは合っていないくて、音楽的には無いほうがいいのかもしれませんが、誰もそんなふうには思わないようで、その子を見て「君がそこにいて、一緒に弾けて楽しくてしかたがないよ」と微笑みかけるのです。男の子はますます張り切って足で拍子を取りながら、口をとがらせ引き続けていました。彼にとって音楽って楽しいと思った最初の瞬間だったでしょう。こうして、次の世代の人たちにも民俗音楽の楽しさが引き継がれていくのだろうと思いました。

おわりに

私がスウェーデンで学んできたことの中で、日本の人にいちばん伝えたいと思っていることは、“幸せを感じる心を持つことの幸せ”だという気がします。民俗音楽を楽しむということは、“一緒にここにおいて、一緒に時間を過ごしている”そのことに幸せを感じるということなのではないかと思うのです。

私は演奏家になりたくてスウェーデンまで行ってニッケルハルパを学んできたわけではなく、ただ弾いてみたかった。そんな私を人々は温かく包み込んでくれました。

私たちは今、ニッケルハルパという楽器を知ってもらうことを通して、スウェーデンの民俗音楽の世界にある“温もり”を日本中に広めていきたいと願い、この度“日本ニッケルハルパ協会”を設立いたしました。

実は2007年10月12日に、当スウェーデン社会研究所の大変温かいご支援のもとに、設立記念コンサートをスウェーデン大使館で開くことができ、お陰さまで素晴らしいスタートをきることができました。所長の須永様ご夫妻をはじめ、JISSの皆様のご温かいお励ましをいただくことがなかったら、協会の設立は遠い先の話になっていたことでしょう。この場をお借りして、心から感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

JISS所報

2007年12月31日発行・・・所報No.341

JISS所報原稿募集

JISS所報では、北欧・スウェーデンの歴史・政治・経済・社会制度などを研究しておられる方、公的機関や福祉・環境・教育などの社会活動機関、企業活動等での交流を通じて北欧・スウェーデンに興味をお持ちの方、あるいはJISSやJISS所報にご意見をお持ちの方々からのご投稿を広く募集しております。

応募方法は下記の通りですので、ふるってご投稿下さい。所報の編集方針に従って逐次掲載してゆきます。

1 応募資

特にありません。ただし氏名・所属・連絡先は明記下さい。匿名の投稿は受けません。

2 内容と字数

北欧・スウェーデンに関するものであれば内容は自由ですが、800字(程度)、1,600字(程度)、3,200字(程度)のいずれかの文長をお願いします。

(まだ文になっておらず、テーマ、アイデアの段階であっても、投稿ご希望であればお気軽にJISS所報編集部にご相談下さい)

3 掲載の可否と掲載時期

掲載の可否、掲載時期の判断はJISS内の所報編集部で行います。
送られた原稿は返却しませんのでご了承下さい。

4 謝礼

ご投稿への謝礼は無料ということをお願いいたします。

5 原稿の送付先

原稿は、「JISS事務局 所報編集部」宛て、Eメール、郵便、またはファックスにてお送り下さい。

Copyright (C) 2007 Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Reserved.